

ウエスギ会長

上杉勝治さん(71)

四日市市天力須賀新町に本社を置くウエスギは、非鉄金属や被覆電線などの産業廃棄物リサイクル業を中心に事業展開している。大正10年創業。

12人きょうだいの末っ子で、「一番上の姉とは24歳違い」。家業で忙しい両親に代わり、「姉たちに育ててもらったようなもの」だが、食事は必ず「家族全員そろってから」が決まり。「食卓の席は父の左側が長男、右側が自分と決まっていた」。「両親は厳しかった」。

トップの横顔



「感謝の気持ちは常に忘れない」と話す上杉会長＝四日市市天力須賀新町のウエスギで

産廃リサイクル業

世界を視察、機械開発

大家族育ち、感謝忘れず

だが、家の中はいつもにぎやかだった」と振り返る。戦中生まれで、子どもころは食糧難だった。父の会社で人手不足で忙しくなってきたため、21歳で入社した。仕事は既に入社して5年、人の兄から学んだ。経営

たが、家の中はいつもにぎやかだった」と振り返る。戦中生まれで、子どもころは食糧難だった。父の会社で人手不足で忙しくなってきたため、21歳で入社した。仕事は既に入社して5年、人の兄から学んだ。経営

兄から引き継ぎ、40歳で社長に就任した。ごみとして処分していた産業廃棄物を「細かく分別することで、リサイクルできる」と考えた。世界各国的のリサイクル工場を視察し、技術を学び、試行錯誤を重ねながら自ら機械を設計し、5年かけて新しい機械が完成した。「ものづくりは好きだったから、楽しかった」と笑顔を見せる。「根本は『もったいない』の気持ち。捨てるものはない」。

長男の圭司さん(48)に6年前、社長を譲った。第一線からは退いたが、朝礼やラジオ体操、会議には出席し、助言しながら見守る。「感謝の気持ちは常に忘れない。自分一人では何もできない。周りがいてこそだと思」と話す。(洋)

を任せ、経験者の姉から教わりながら独学で身に付け、いつの間にか数字で会社全体を見るようになる。「どうすればもっと会社を盛り上げていくのか」と考えるようになり、少しずつ「企業化し、組織化しなければいけない」と思うようになった。

信仰心があつた両親の下、先祖を大事にする教えを忠実に守ってきた。毎朝三時半に起き、仏や

昭和18年生まれ。四日市市出身。同39年上杉物産(現ウエスギ)入社、同57年社長、平成20年会長。四日市商工会議所理事。